

2022年 4月 26日

2021年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 (○) ・個人研究 ()	
研究代表者 (所属・職・氏名)	家政学部・教授・宮武恵子	
研究課題名	原のぶ子の作品の研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
丸田 直美 佐藤 比奈乃 加藤 裕子	家政学部・被服学科教授 家政学部・被服学科助手 家政学部・被服学科助手	作品、パターン関連資料のデータブック作成 作品、パターン関連資料のデータブック作成、整理 デザイン傾向分析データの整理
研究期間	2021年4月1日 ～ 2022年3月31日	

研究実績の概要 (1)

1. 研究目的

原のぶ子氏(1901-1997)は、共立女子職業学校を卒業(1925年)し、パリ留学から帰国後、教育活動と洋裁文化の啓蒙活動、洋裁学校経営を中心に、戦後日本の服飾界に多大な功績を残した人物である。また、デザイナーズクラブ「サロン・デ・モード」(新進気鋭のデザイナーの登竜門)を創立した。2019年度の研究助成^{1), 2)}においては、2017年度に寄贈を受けた同氏に関する資料(作品や記録等)から、戦後の日本の服飾業界における業績や貢献度を検証した。さらに、作品との関連性について調査研究をすすめ、同氏が時代の変化の中で既製服ブランドを持つデザイナーにはならず、日本人のもつ和の文化を大切に、西洋と東洋を独自の表現で融合させた作品を発表し続けたことを明らかにした。しかしながら前稿では、資料の一部の概略調査に留まった。そこで本研究では、西洋と東洋を融合させた作品に着目して、意匠と造形の2つの視点で分析を行うことを目的とする。

2. 研究方法

1) 意匠の分析

同氏が描いたデザイン画86枚(1965～1969年/8枚、1970～1979年/25枚、1980～1989年/53枚)を資料として、和の要素がみられるデザインについて、和服のような形(アイテム、シルエット、ディテール)と日本の伝統的な生地との2つの視点でデータ化する。データとデザイン画を照らし合わせて、デザイン表現の特徴を考察する。

2) 造形の分析

寄贈された実物作品のうち、制作年代が新しい作品で、和服地を用いて、和の要素がみられるデザイ

研究実績の概要（2）

ン2点について、パターンを採取し、和服地から洋服への構成方法や縫製に関して考察する。パターンはCADに取り込み、マーキング機能を用いて和服地にパターンを配置し、和服地へのパターンの配置方法についても推察する。

3. 研究結果及び考察

デザイン画に描かれている86スタイルの内、69スタイルに和の要素（形、生地）がみられる。69スタイルの内訳は、形と生地ともに和は50スタイル、形のみ和が19スタイルである。同氏が和の要素を多く表現していることが分かる。羽織のようなガウンは、70年代は5スタイル、80年代は13スタイルで、後半になると増える傾向がみられる。ガウンのデザインバリエーションを丈の長さで表現している。シルエットとディテールともに和のスタイルは、70年代は6スタイル、80年代は42スタイルだった。アイテム、シルエット、ディテールの3つの要素がみられるスタイルは、70年代は4スタイル、80年代は12スタイルである。ディテールは、襟元は深いVネックやカシュクール、袖はドルマンスリーブや肩衣のような形状に似たフレンチスリーブ、帯風の太いベルトが多い。特に後半は、1スタイルに複数のディテールを用いている。記載されている生地名を整理すると、伊勢崎織物工業組合（群馬県伊勢崎市）の記載が多く、次に手染めの柄が続く。伊勢崎織物工業組合は、明治13年(1880年)に伊勢崎太織会社としてスタートし、伊勢崎市を中心にした地域の機屋で構成されている。その意匠や風合いは高く評価され、終戦後も売り上げを伸ばした。しかし、生活様式の西洋化により需要が減退し徐々に売り上げや生産量が減少していき、生産者も減っていったという歴史がある。意匠の分析からは、日本の伝統産業衰退について問題意識を持ち、和服でなく洋服として作品提案をした同氏の志を推察する。また、和の表現が後半になるにつれて多くなった要因も、社会や時代背景と密接に関係があると考えられる。

同氏の実物作品2点のパターン採取を行った。いずれも80年代に制作されたもので、上着とワンピースのアンサンブルである。ワンピースには帯をイメージする太いベルトがついていた。2点とも和服地で制作されているので、身頃幅は和服地幅38cm以内で納まるように構成されていた。そのため、洋服地では1枚で構成することの多い後身頃の中心に縫い目を作り、2枚構成になっていた。袖も一般的に曲線で作られる袖（セットインスリーブ）にはせず、身頃から続くドルマンスリーブやフレンチスリーブが採用されていた。襟ぐりも洋服で多く採用されるような曲線のものでなく、タックを利用して襟のようにしたり、ラペル風に折り返して襟とするなど、直線をうまく生かしたデザインとなっていた。この2点の作品は、和のイメージを残すよう、立体構成技術を巧みに利用して、直線の生地を曲線であるボディにフィットするよう制作しているため、このようなパターンになっていると考えられた。

西洋と東洋を融合させた同氏の作品制作は、デザインとパターン、縫製、生地等に関して、すべてに精通していた同氏ならではのものと考えられる。日本の既製服産業の創世期から発展期にかけて、教育者であり服飾研究者でありデザイナーである同氏でなければできなかったアプローチであったと思われる。

1) 2019年度総合文化研究所 研究助成研究成果報告書

2) 共立女子大学・共立女子短期大学 総合文化研究所紀要 第27号, p3-16